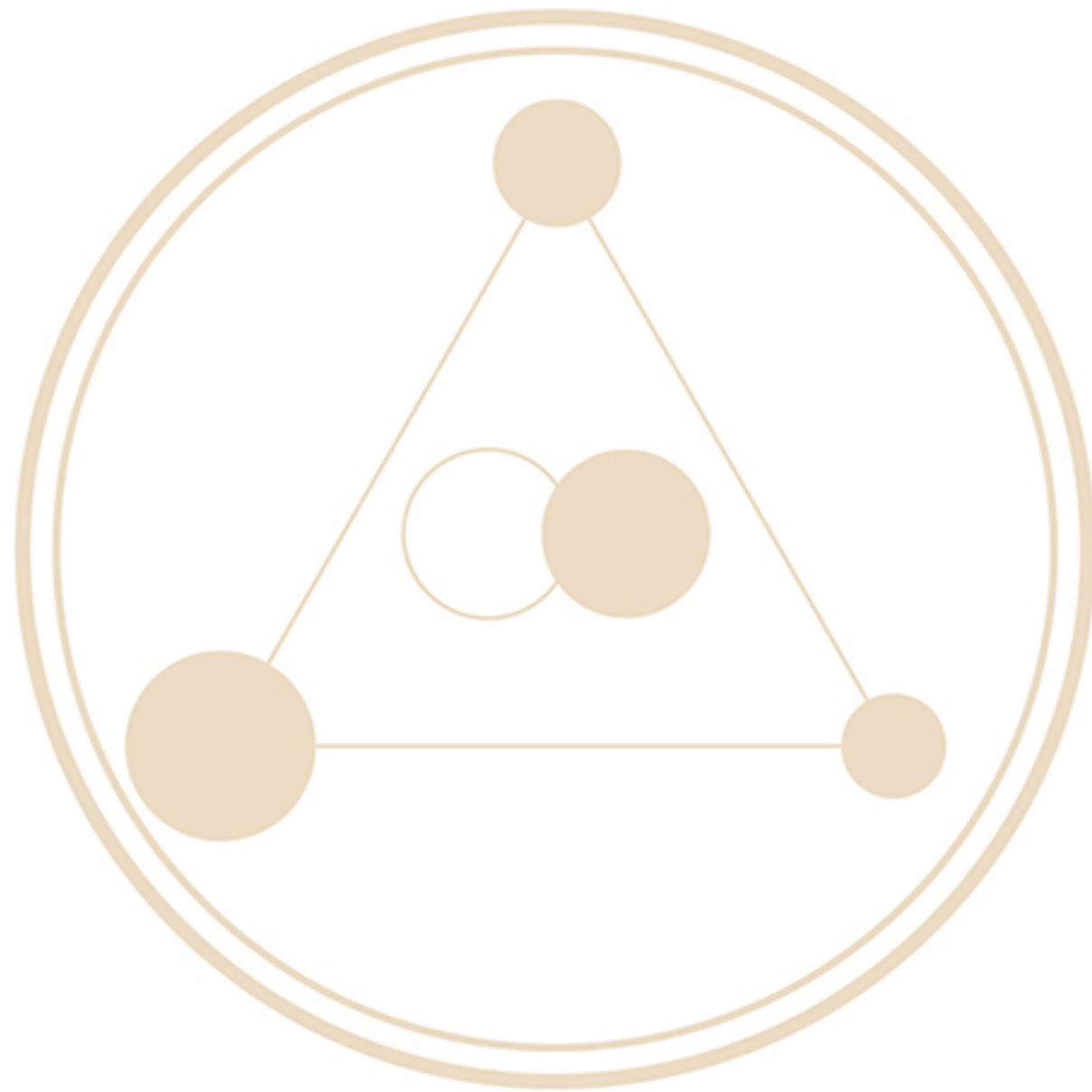


初瀬川智則

○ 真実の部屋

△ 上

ROOM OF THE TRUTH
ROOM OF THE TRUTH



小さな部屋
訪問者
待つ者
生還への歩み
ダラ
サヴィトリ
始想の石
未開の島
未完の本
羅針の翠玉
旅立ち
蛇の巢
森の男

小さな部屋

ふと目が覚めると、僕は冷たい床の上に寝転がっていた。

あたりは暗く静かで、窓からこぼれる月明かりが自分のいる場所をうつすらと照らしている。目をこらして辺りを見渡すが、視界に写るのは小さな窓と何処までも深い闇のみだ。

横たえた体を動かしてみよう。すこし手足にしびれを感じるが、どこかを痛めている様子はない。体を起すと頭がずっしりと重く感じる。

止まっていた思考が少しずつ動き始めた。

『酒によって廊下で寝入ってしまったのだろうか？』

いや、どうやら様子が違う。床から伝わる冷たさや、ただよう空気が自分の知る『それと』まるで違うからだ。ここは自分の知っている場所では無い。

「ここは何処だ？」

思い返してみるが、自分がおかれている状況に行き着く記憶がまるでない。心を落ち着かせ、目を瞑り、更に記憶の先をたどる――

「会社帰りに娘の誕生日プレゼントを買って……予約したケーキを引き取り……妻に帰りの電話をして……」

しかし、こちら先が思い出せない。

時間が経つにつれて徐々に暗闇に目が慣れてきた。小さな正方形の部屋に一ヶ所、両扉の小さな窓が付いていた。部屋の真ん中にはテーブルを挟んで二脚の椅子。さらに奥の壁には窓と対照的な大きく四角い穴が見える。テーブルと椅子の他には家具はなく、妙に整然とした印象だ。床や壁は大理石で出来ているのか、月から注がれる明かりが反射し、天井を柔らかに照らしていた。周囲の状況がわかるにつれ、自分の身に起こったことに対して不安が少しずつ心を浸食しはじめる。

僕は我に返ったように体や頭を無造作にさわり、自分自身の存在を確認した。するとある事に気付いた。自分が着ている服は、会社帰りに着ていた服装のまま。腕には時計、ズボンのポケットには財布とケータイが入ったままだ。

ケータイに気付いたことで、広がり始めた不安が少し小さくなった。ポケットに手をつ突っ込み、ケータイを取り出す。さがるような思いで画面をみるが――電波が届いていない。窓の近くで再度確認するも、圏外の文字が消えることはなかった。

僕は、ケータイをポケットに押し込み、自分を落ち着かせるように部屋の椅子に腰掛けると、すこし冷静になろうと今の状況を整理し始めた。

「会社帰りに立ち寄った洋菓子店から記憶がない。この場所には、自分で来たのか？……それは無い。誰かに連れてこられた……何のために？……何か事件にでも巻き込まれたのか……？」

しかし、誰かに恨まれるような覚えもなければ、さらわれ身代金を要求さ

れるような裕福な身分でもない。あれこれ考えてみるものの、解決の糸口は見つからない。すると一つの現実的疑問が浮かび上がった。

「いつからここにいるんだ？」

腕時計に目を向けると時計の針は十一時丁度を指していた。日付は7月3日。今日は娘の誕生日だ。記憶の最後と今の日付は一致している。

「確か店を出たのが閉店前の七時だから——今でほしい四時間だ」

記憶の失踪から四時間という最初の事実見つけたと同時に、妻と娘の顔が頭をよる。

「今頃どうしているだろう。心配しているだろうな」

以前、自分が事故で右腕に大きなすり傷を作った時、娘が大泣きして夜中まで看病してくれたことを思い出した。かすり傷程度であの様子なら、今起こっている現状が5歳の彼女にもたらす影響は相当なものだ。妻にしても、「これから帰ると」告げた夫がいつまでも帰宅しない異常な事態に戸惑っているに違いない。

行き着かない答えを見つけるのをやめ、自分の帰る場所を探すかのように窓から外に目を向けた。外灯などの明かりは一切見あたらない。そのかわりに、月明かりに照らされた森がどこまでも広がっているのが確認できた。空には見たことも無い程の無数の星々が輝き、その中心には一段と輝く月が辺りを照らしていた。月と星が共存する不思議な情景だ。この状況から察するに、僕はどこか山奥の建物にでも連れてこられたのだろう。

窓を開けようと試みるが、堅く閉じられたまま、まるで壁の一部であるかのようにびくともしない。窓に背を向け、今度は大きく口を開いた闇の穴に向かい静かに歩き始めた。穴はこの部屋から出られる唯一の通路に違いない。何歩か近づいてみるが、穴の中は異様に暗く月明かり程度の明るさではその先をうかがい知ることができない。

心の中で闇に対する恐怖が蛇のように音も立てずにうごめいた。

僕はふとあることを閃いた。ケータイだ。ポケットからケータイを取り出し、液晶画面の灯りで闇の中を照らしてみた。するとどうだろう。闇の穴は姿を隠し、かわりに大きな黒い扉が姿を表した。通路だと思っていたのは真っ黒い扉だったのだ。

僕は黒い扉を目の前にし、安心と絶望が交錯するのを感じた。窓と同じように鍵が掛けられていては、この部屋から出る術を奪われてしまうからだ。まして、善意無く誰かを連れてきた部屋ならば、なおのこと鍵を掛けない理由などない。

僕は焦る気持ちを押さえながら、扉の前に歩み出た。扉は木製で黒く塗りつぶされた鉄製の無骨なノブが付いていた。その他には何の装飾も施されていない。ただ大きく、無機質で不気味だった。

僕は息を殺し、扉の先に意識を集中した。外に見張りがいてもおかしくないと考えたからだ。しかし、扉の先からは、何者の気配も感じることが出来ない。扉に耳をあて、聞き耳を立てても、聞こえてくるのは異様に速い自分

の鼓動だけだ。

意を決し、扉のノブを握り、祈るような気持ちでゆっくりと回す。

『開いていくれ』

するとノブは僕の気持ちを受け入れたかのように、音もなく静かに回った。鍵はかかっていない。そのまま扉を押すと、黒く大きな扉は、これまた音も立てず滑るように「スツ」と開いた。僕の手足は極度の緊張からか震え、鼓動が外に聞こえてしまわないかと心配になるほど高鳴っていた。

扉の隙間から、外を覗いてみると、左右に長い通路が伸びているのがわかった。壁には小さな丸い照明のような物が等間隔に並び、うっすらと通路を照らしている。僕は一つ大きく深呼吸すると、次の行動に移った。

訪問者

部屋から無事に出られたものの、僕は行き詰まっていた。

鏡に照らしあわせたかのように左右に長く延びた通路。明かりが乏しいこともあり、どちらの端も確認することができない。壁をみるも、扉が見えるのは私のいた目の前の部屋のみで、長い通路の真ん中に、小さな部屋がたった一つしかない。一般的に考えてもあり得ない構造をしている。左右どちらかに進めば、別の部屋があるのかもしれないが、それを確認することはできない。誰かに見つかってしまうのではないかという思いが不用意な行動に釘を刺していたのだ。

あたかも自分が一直線の迷路にでも迷い込んでしまったかのように感じた。僕はしばらくの間、左右の廊下を少し行っってはもどりを繰り返し、何か情報がないかと暗闇の先を睨み付けていた。

すると見ていた先で変化が起きた。扉から向かって右方向の通路の奥の明かりが突如一つ消えたような気がしたのだ。僕は目を見開き、通路の奥に意識を集中した。するとまた一つ明かりが消えた。さらにまた一つ。暗闇がこちらに近づいて来るようにも見える。

僕は、床に耳をあてた。

「コッ コッ コッ」

ゆっくりとした足音が聞こえる。誰かがこちらに近づいて来ているようだ。

僕は一瞬、ここに止まり、相手を待つかどうか悩んだ。もしかしたら自分をここから連れ出してくれる人物かもしれないと思っただけだ。しかし、闇と共に近づいて来る人物を僕は快く迎えることがどうしても出来なかった。とっさに僕は自分の足音が聞こえないよう靴を脱ぎ、脇に抱えた。足音の方を再度確認するが、目視では人物は確認できない。しかし確実に照明が消えているのはわかる。

僕は低い姿勢のまま、足音とは反対方向に動き出した。

どれほど進んだらうか。振り返ると自分のいた部屋の扉が微かに見える程度の所まで来ていた。ここまで来ると通路の端も確認できる。突き当たりの壁に横から新たな光がうつすらと漏れているのが見えたからだ。あの位置で通路が折れているに違いない。

僕はいったん足を止め、抱えていた靴を再度足に履かせると、紐を強く結び直した。こんどは扉の方を見ながら足音がしないよう何歩かさがり、そして身を潜めた。

丁度そのころ、近づいてきた足音が扉の前に到着するところだった。鼓動が高鳴る。

目をこらすと、うつすらと人影が確認できた。人影はゆっくりと扉の前まで来ると音もなく扉を開け、吸い込まれるように部屋の中へと消えて行った。

私は扉が閉まると同時に通路の端にむかって全速力で駆け出していた。自分の足音が通路の壁に反響し、まるで数人の男達が自分を追いかけているかのように聞こえる。走り始めて数秒も経たず「バン」と扉が勢いよく開く音が通路に響き渡った。

「待つんだ！」

後ろから自分を呼び止める声が聞こえた。男の声だ。

僕は振り返らず、通路の端に向かって自分の足音からさえ逃げるように、全力で走り続けた。通路の端まで来ると、右手に階段がみえた。僕は間髪入れず転げるように階段を下る。階段は中心のない螺旋構造になっている。下りながら階段の上のほうを確認する。追ってきているはずの男はまだ階段に到達していないようだ。

かなりの段数を下ってきたが、階段の途中で他の階に通じる通路や入口は不思議と見あたらない。さらに下ると床らしき階段の発着地点が見えてきた。下まではもう少しだ。

階段を降りると、そこは片側が全面ガラス張りでできた広いロビーのような空間が広がっていた。天井は異様に高く、ロビーといても椅子や調度品などは確認できない。まだ使われていない美術館のようにも見える。ガラス面は、大小の幾何学的な枠が設けられ、月明りによって床に幾重も重なる四角い升の模様を浮かび上がらせていた。照明が無いのにもかかわらず、月明かりと床の反射で辺りは明るく、空間全体を見渡すことが出来る。運良くこのロビーには追ってきている男の仲間も見あたらない。

急いでこの不可思議な建物の出口を探してみるが、なかなか見つからない。ガラスに施された無数の模様が出口をわかり難くしていたのだ。立ち止まり耳を澄ますと、階段を下りてくる男の足跡が聞こえる。音が反響するため、何処まで近づいているのか見当もつかない。

僕は出口を見つけるのを諦め、ドア二枚分ほどの少し小さめのガラスにねらいを定め駆け出した。こうなったら強行突破だ。目の前でガラス面が迫ると、衝撃に負けぬよう歯をくいしばり、筋肉を硬直させた。多少のケガも覚悟の上だ。しかし意に反して、体はガラスの衝撃を受けることはなく枠の

間をすり抜けた。その枠には何故かガラスがはまっていなかったのだ。驚きもつかの間、一瞬、体が重力から開放されたような錯覚を受ける。目を開くと地面が目の前に迫っていた。どうやら窓の外は人の背丈ほどの石垣になっていたらしい。無意識に僕は体を丸め、衝撃に負けぬように体に力を込めた。

次の瞬間、背中と腰に激しい痛みが襲った。幸い地面は芝のような草に覆われていたため、大事には至らなかったが、あまりの痛さと衝撃で息が出来ない。ここから即座に立ち上がり走り出すのは到底、不可能だ。

僕は痛みと闘いながら這いつくばるようにまわりを見渡した。涙で視界がはつきりしない。必死で涙を拭い、隠れられるような場所を探す。追っ手は、既に螺旋階段を下りきっているはずだ。

すると自分が落ちた石垣の下に、上下五十センチ程度の溝があるのに気づいた。僕は急いで体を横に転がし、細い窪みに体を押し込んだ。石垣の溝は木の影になり、月明かりを遮ってくれている。ここなら簡単には見つかる事はないだろう。僕は背中の痛みに耐えながら、静かに待った。顔からは、汗なのか涙なのかわからない水滴が止めどなく流れ落ちている。しかし溝は思った以上には狭く、それを拭うこともままならない。

すると十メートルぐらい離れた場所から自動ドアが開くような機械的な音と共に人影が現れた。あの男だ。

男は辺りを何度か見渡した後、現状を悟ったかのようにつぶやいた。「まさかこんなにも早く目を覚ましていたとは――。こうなってしまうのは、もどって、あちら側から接触するしかないな……」

男の声を聞いて、僕は「ハッ」とした。その声に、どこか聞き覚えがあったからだ。

僕はとっさに頭をフル回転させ、会社の人間や友人、親戚等、ありとあらゆる知人の顔を思い浮かべた。しかし、どうしても声の人物を特定することができない。自分の知っている人物であることは間違いないが、その人物の映像が、まるで霧の中にあるかのように姿を現してくれない。

現れた男は、その場で他にも何やら喋っていたようだが、声が小さすぎて聞き取れない。男は、悔しそうなそぶりを見せると、再び建物の中に消えていった。

僕は石垣の隙間から抜けだし、大きなため息を一つ吐いた。

「もう、大丈夫そうだな」

一時ではあるが、極度に張りつめていた緊張感から解放され、安堵感に包まれるのを感じた。しかし、まだ油断はできない。男の話では、また来るような事を言っていた。さらに仲間をつれて来るかもしれない。どう考えても、たった一人で僕をここまで運んできたとは思えない。仲間がいると考えた方が自然だろう。逃げるとしたら今しかない。

僕は次の行動を起こす前に、体のケガの具合を確認した。大きく息をすると右の脇にすこし痛みを感じるが、動けない程でもない。腰も打ち身程度ですんだようだ。僕は体が動くのを確認すると、建物の中に新たな見張りがい

ないか十分注意しながらその場から離れた。

建物のまわりには、背の高い木々が所々生えていて、身を隠しながら進む事ができた。しかし数十メートルも進むと、木々の植え込みも無くなり、奥に広がる森までは見通しの良い草原が広がっている。夜とはいえ、月明かりに照らされた野原は昼間のような錯覚を受けるほどに明るい。さすがにそこに出てしまえば見つかってしまうだろう。しかし、僕は見つかる事に対してそれほど心配していなかった。走り出してしまえば、奥の森まで逃げ切る自信があったからだ。子供の頃から駆けっこで負けた記憶がない。

僕は木の陰から抜けだし、月明かりに照らされた草原へとゆっくりと走り出した。少し進み振り返ってみると、月に照らされた大きく真つ白な四角い建物が浮かび上がっていた。一階にあたる部分は全てガラス張りになっている。そして正面の壁の上の方に一カ所だけ、両扉の窓が見えた。見ると部屋の窓が開いている。

「あそこが僕のいた場所か？」

すると開いた窓から何者かが顔を覗かせた。男の仲間か？ 月明かりでは顔まで確認することが出来ない。窓の男は僕は気付くと、制止させるように叫んだ。

「おい。待て。お前は——」

僕は新たな追っ手が来ると思い、男の声が聞こえるやいなや、森に向かい駆け出した。

窓の男が最後まで何を言ったかは聞こえなかったが。間違いなく僕の知っている声だ。

僕は草むらに足を取られ何度か転びそうになるのをこらえながら草原を駆け抜け、森の暗闇に滑り込むことができた。森に入ってから直ぐには立ち止まらず、木々の間からこぼれる明かりを頼りにしばらく進み続けた。すると森が少し開け、ごつごつとした岩場が現れた。ここなら身を隠せそうな場所もたくさんある。

僕はまわりを見渡せる大きな岩の陰を見つけ、身を潜めることにした。ここまで来ればそう簡単には見つからないはずだ。

地面に尻をつき岩に体を預けると、全身が疲労感に包まれた。痛めた背中や腰も、思い出したかのようにズキズキと疼き出す。体の疲労とは裏腹に、気持ちには逃げ切った達成感からか、すこし高揚していた。気付くと笑みまでこぼれている。普通に生活していたのでは、まず味わうことのない緊張感が、自分の感覚を狂わせているかもしれない。

動くのを止めた途端、辺りは急激な静けさに包まれていた。いや、元の静けさを取り戻したと言うべきだ。虫の音も獣の声もまるで聞こえない。あたかもこの空間には、自分しかいないのではないかと錯覚を覚えるほど奇妙な静けさが辺りを覆っていた。しかしこれがかえって僕には都合良かった。この状況ならば、追っ手が来たときに直ぐに気づくことができる。

少し休んで落ち着きを取り戻すと、新たな問題が頭に浮き上がっていた。

無事に逃げてこられたのは良いが、ここから先、どう行動すべきかまるで策がない。当然、食料や水も持ちあわせていないし、ここまで連れてこられた経緯も分からない。これでは何も持たぬまま山で遭難しているのとなんらかわりがない。現に乾いた喉を潤せず、必死に唾を飲み込もうとしている自分がいる。

『あそこで捕まっていた方が安全だったのだろうか？』

ふと弱気な考えが頭をよぎる。あの場所に止まれば助けが来たかもしれない。しかし「戻るのか？」と問われれば、間違いなく「ノー」と回答するだろう。そんな自問自答を繰り返しながら無意識にケータイを開き、待ち受け画面で微笑む娘の写真を眺めた。

しばらくケータイの画面を見つめているとあることに気づいた。

「電波がある！」

建物の中で圏外を確認した時は、山奥という場所が原因なのだろうと思いついていたせいも、電波のことなど気にも留めていなかった。しかし確かに電波は三本しっかりと立っている。

『これで助かる』

急いで電話帳を開き、妻のアドレスを選ぶ。しかしある考えが通話ボタンを押す寸前で指を止めた。妻と連絡が取れたとしても、この場所が分からなければ助けを呼びようがない。さらに言えば、ここが何処なのかということが一番知りたいのは自分自身なのだ。今ならばその欲求を満たせるツールが目の前にある。

妻との会話を少しのあいだ我慢し、ケータイに搭載されているGPS機能で自分の現在地を表示した。数秒の沈黙の後、誤差1メートルと言われる世界最新鋭のGPS機能が導き出した答えに僕は混乱した。自分の想像していた場所とのあまりの違いに、地図に記された場所を理解するのにかかりの時間を要した。そしてその答えに愕然となる。何かの間違いだと思い、何度か検索を試みるものの、ケータイの地図は同じ位置を示すだけだった。

地図に記されたその場所とは、娘のバスデイケーキを引き取りに立ち寄った洋菓子屋の駐車場。奇しくも僕が記憶を失った場所と一致していた。

「こんな時に故障なのか、それとも……」

GPSが示す位置と、記憶の喪失。その二つは偶然か必然か同じ場所を示す。

僕は導き出された結果に落胆しながらも、もう一つの希望に賭け、再度ケータイの指を動かした。

『プルプルプル——』電話は数秒後につながった。

「もしもし：遙（はるか）か。僕だ」